

『必携 英単語 LEAP Basic』の刊行によせて

竹岡 広信

1. 『必携 英単語 LEAP Basic』企画の背景

2年前に刊行されました『必携 英単語 LEAP』(以下『LEAP』)は、幸いにして多くの先生方からご支持を得ることができました。しかし同時に、「コンセプトはよいが本校の生徒には情報量が多すぎて使いづらい」「もっと基本的な単語、例えば、中学既習の単語を載せてほしい」などのご意見もいただきました。よって『必携 英単語 LEAP Basic』(以下『LEAP Basic』)は、「英語が苦手」「中学レベルの英語が固まっていない」という生徒をイメージして、「情報を最重要なものにのみ絞る」「中学レベルの語であるが発信には極めて重要な語」「発信に役立つ基本熟語」を柱とする新たな単語集として世に出すことにしました。著者の私も編集者もまったく新しい単語集をつくるつもりでのぞみました。「『LEAP』の語彙を少なくして編集し直しただけの、見かけ倒しの basic」にはしたくないという強い思いがあります。

2. CEFR-J リストに基づく語句の選定

CEFR-J は欧州共通言語参照枠(CEFR)をベースに、日本の英語教育での利用を目的に構築された、新しい英語能力の到達度指標です。2回にわたって行われた大学入学共通テストの試行調査の解説でも CEFR レベルが記載されていたように、英語の習熟度を測る指標として、CEFR レベルが重要視されていることは間違いないと思われます。そのため今回、語彙の選定においては『LEAP』と同様に CEFR-J の word list を基準として採用いたしました。

今回も『LEAP Basic』を編むに際して、投野由紀夫先生から使用許可を頂戴しました(ただし熟語は CEFR-J のリストにはないので、独自の頻度表示をしました)。英作文指導の際に「research は動詞で使うより名詞で使ったほうがいいよ」といった直感的な説明より、「research は名詞は CEFR-J で A2 だけど、動詞では B2 だから動詞として使う

のは少し難しいよ」という説明のほうが説得力があります。

過去すべての共通一次・センター試験でたった1回しか出ていない単語は 1,153 語もあります。例えば violate(B2), troublesome(B2), trivial(B2), transition(B2), thoroughly(B2), stiff(B2), dread(B2), dismiss(B2)などです。これらのほとんどが CEFR-J では B2 以上の難語です。教師の立場からすれば「これくらい知っておいたほうがいいよ」と思うものも含まれています。しかし、過去 40 年にわたる良質の共通一次・センター試験で 1 回しか出てきていないような単語の暗記を初学者に強要しても、負担の割に得るものが少ないのは明白です。よってこのような単語は極力削除しました。

3. active と passive の線引き

『LEAP Basic』では『LEAP』と同様に、収録語彙を active と passive で線引きをしました。active な語は書いたり話したりするのに必要な語として「使うために暗記するための解説」で手厚く、passive な語は読んだり聞いたりするのに必要な語として「語義のイメージを知り、また暗記するための手がかり」をできる限り書き、「丸暗記」にならないように工夫しました。

PART 1(400 語)、PART 2(300 語)、PART 3(300 語)の合計 1,000 語を active に分類し、PART 4(400 語)を passive と分類しました。ただし、ベーシックというレベルを考え『LEAP』では active としていた単語も passive に分類したものもあります。例えば insist「言い張る」、object「(感情的に)反対する」です。こうした単語は入試の語法問題で頻出であったため、教師の心には「重要語」と印象づけられる傾向がありますが、初級レベルの英作文で使用される語ではないと思われます。

『LEAP』と同様に、active に分類した語には【頻出】【注意】【比較】という項目をつけました。

【頻出】には「発信を前提として必要だと思われる熟語、定型表現など」を厳選し掲載しました。【注意】には「その語を使った発信で、生徒がよく間違えるポイント」を掲載しました。例えば“seem”の【注意】では「日本語では一見、受け身のようにだが、seemは受け身にしない」としました。また、【比較】では、類義語や語法の似た語を並べて掲載し、比較することで、そのニュアンスや使い方の違いを明確にしました。“stay”の【比較】では「stay (at) home(*at は省略可)⇔ work at home(*at は省略不可)」としました。

4. 中学レベルの基本単語・熟語 400 を徹底的に解説

『LEAP』で巻頭に「重要な基本動詞」として 42 語を掲載し、解説しましたが、先生方からは非常に好意的な感想をいただきました。これは「生徒は中学レベルの単語をしっかりと使えていない」という声を反映したのだと考えています。そこで『LEAP Basic』では、そのコンセプトを踏襲して新たに PART 1 とすることにしました。この PART では、①中学校で使われている主要な教科書をできるだけ数多く調査 ②過去すべての共通一次・センター試験本試験・追試験(筆記とリスニング)で出題された単語の分析(調査した総語数は 5,605 語) ③『入試必携英作文 Write to the Point』の解答に使われている語の分析 ④私の過去 40 年にわたる英作文の添削経験から、「英作文や発話で重要となる単語と熟語約 400 語」を精選しました。「これが使えれば基本的な英作文や発話ができる」という超厳選の 400 です。これだけでも『必携 英作文ハンドブック』という 1 つの本として世に出したいレベルになりました。

トップバッターは“a”で、語義は①「ある(1 つの)」②「～につき」として、「ニュアンス」は①「(特定できない)ある～(※訳さないことも多い)」②「=per」としました。【注意】には『『犬が好きだ。』のように『犬という動物全般』を示す場合、冠詞をつけず、複数形を用いて I like dogs. とする。』としました。2 番バッターが“the”です。高校生でも a と the の区別がついていない生徒が非常に多いことを考慮しました。“the”は 2 義、①「暗黙の了解を示す」②(the+単数形)「総称を示す」として、それぞれの用例を Let's meet at the station. 「(君の知っているその)駅で会おう。」

play the piano 「ピアノ(という楽器)を弾く」としました。②の【注意】は「主に楽器や(科学技術の)発明品、体の部分などに使われることが多い」としました。「楽器名だから the がつく」のではないということを示しました。

「考える」の think を他動詞と思っているためか、think him のようなミスが相当出てきます。そこで“think that SV”で 1 つの見出しをつくり、“think about ～”を別項目とすることにしました。このように重要度が高いものについては同一の単語でも複数の項目に分けて掲載しています。本当に覚えてほしい項目を「埋もれさせたくはない」という願いからです。

「今日は雨が降っているね。」It is raining today. が書けない高校生が増えています。it を主語に置けない生徒が多く、it を主語にしても It is rainy today. 「今日は雨模様だ。」という英文を書いてしまう生徒が多いです。よって『LEAP Basic』では見出し語に“rain”を掲載して、rainy との違いを【注意】で説明することにしました。

英作文をするためには基本熟語は欠かせません。“go to ～”や“both A and B”のレベルから“believe in ～”や“take the train”などのレベルの熟語を精選して掲載し、「ニュアンス」や【注意】も充実させました。例えば“get into ～”「～に乗る」の「ニュアンス」では「(身体を曲げて乗り込む比較の小さな乗り物)に乗り込む」，“get on ～”「～に乗る」の「ニュアンス」では「(立ったままでも乗れそうな大きい乗り物)に乗り込む」としました。

5. グループングやニュアンスの必要性

ある英作文で「その食べ物の味を説明する (describe the taste of the food)」というのがありました。やってもらった生徒の大半が explain を使いました。「説明する」に対応する英語は tell / show / describe / explain がありますが、大半の単語集に載っているのは explain と describe で、しかも describe は「描写する」という訳語がつけられていることが多いです。よって、生徒の頭の中では「説明する=explain」となっています。このような事態を回避するためにはグループング(類義語をまとめて、その相違を明確にすること)が不可欠であると考えます。

「起きる」という日本語を見ると happen を使う生徒がほとんどです。つまり happen = 「起きる」と覚えると、生徒はどんな場面でも、この単語を使ってしまいがちになります。実際には「地震が起きる」の「起きる」は通例 there is ～, 「(火事・戦争が)起きる」は通例 break out を用います。よって本書では、これらをグルーピングし、各語句のニュアンスを解説することによって使い方の差を示しました。

日本語では「～で」であっても英語は様々な訳語が考えられます。with ～「(手に持つ道具を示して)～で」と on ～「(TV やスマホ, DVD, YouTube といった機器などを示して)～で」の区別ができない高校生も山のようにいます。ただし、見出し語に with ～とか on ～とすると、抽象度が高すぎるので、まずは“with a pencil”と“on YouTube”を見出し語にして、核となる表現を覚えてもらうことにしました。

look at と see と watch の区別もできない生徒が非常に多いことを考慮して、それらをグルーピングすることでそれぞれの違いが明確にわかるようにしました。イラストも掲載し理解の助けとしました。

これら以外でも already / yet / still, early / quickly / soon / right away / at once, some / any / much / many / a few / a little / a lot of, make / have / let, thank / appreciate など英作文で間違いやすいものを網羅し、それぞれに「ニュアンス」, 「使い方」を詳しく書いています。

6. 掲載する情報を極限まで削除し、用例はシンプルに

『LEAP Basic』は「英語を苦手とする子の目線」に立つことからスタートしました。よって「できるだけ学習者の負担を減らす」ものにするに決まりました。そのため、新規の単語・熟語も、既存の『LEAP』から再掲載する単語も、その掲載する情報量を極限まで削りました。「情報を豊富に載せる」ことは実は簡単なことなのですが、「情報を削る」のは身を削るくらいつらい作業です。例えば“harvest”の語義は『LEAP』では①「収穫」②「～を収穫する」③「(臓器・体液などを)摘出する」を挙げましたが、『LEAP Basic』では「収穫」だけにとどめました。また『LEAP』の“experiment”の【頻出】では do[carry out, conduct] an experiment on ～

「～に対する実験をする」 an experiment with ～ 「～を用いた実験」としましたが、『LEAP Basic』では do[carry out] an experiment 「実験をする」のみとしました。さらに“continue”の用例は Ann continued to work hard after she had a baby. が原案だったのですが、もっと短くして Ann continued to work hard. とし、最後にはさっと口に出せるレベルの continue to work hard まで縮めました。用例は語のニュアンスを知るためには重要ですが、『LEAP Basic』では語のニュアンスの解説があるので、用例は「一息で言えて頭に残るもの」を目指しました。また、用例は初学者を意識して、単語もできるだけ平易なものを使用しています。

7. 発音へのこだわり

昨年『LEAP』を使用している高校1年生を見てがく然としました。その子はずいぶんと英語が苦手らしく発音記号の下にカタカナで読み方を書いていたのです。僕は「音声ダウンロードがあるから、発音記号はなんとなく読めるようになるだろう」と高をくくっていました。しかし英語の苦手な子にとっては「発音記号」=「絶対読めない」というイメージがあるようです。よって発音記号の下にカタカナ表記を併記することを決断しました。

「カタカナ表記」に抵抗を示す先生は多いと思います。「カタカナ表記」に対する反論だけでも1本の論文が書けそうな気がします。しかし、make を「マケ」と読んでしまう生徒のことを考えると、こうした表記も必要であると考えました。ただし、PART 1で、ページ下方に「発音の仕方の注意点」を適宜コラムとして掲載し、正しい発音のためのヒントを26のコラムにまとめ、具体的に示すことにしました。一例を挙げます。

不要な母音を発音しないでおう！

日本語は子音と母音がセットになり母音だらけの発音ですが、英語は子音だけの発音があります。例えば speak [spi:k] は s と p の間、k には母音が含まれません。不要な母音は発音しないように注意しましょう。

8. 覚え方・ニュアンスの充実

『LEAP』同様に、丸暗記にならないように工夫

を重ねました。語源を示す場合には、その連想の過程をできるだけかみ砕き、具体的に示し、さらに、同語源の単語を示すことで理解を深める工夫をしました。例えば“humid”「湿気が多い」の覚え方には、hum-[土] → 「(土の周りには)湿気がある」*human「人間(土の上を歩くもの)」としました。

『LEAP』同様、「ニュアンス」には徹底的にこだわりました。例えば“speak”の「ニュアンス」には、「(音として)言葉を発する」(※「話す相手」はいてもいなくてもよい)とし、“talk”は「(少人数で誰かと)話をする」(※「話す相手」が必要)、としました。

9. コラムの充実

PART 1～3には、全部で86(予定)のコラムを適宜、挿入しました。これには大きく分けて3つの願いがあります。①正しい発音の仕方や発音記号を習得してもらいたい②前置詞や、基本副詞(offなど)のコアとなるイメージをイラストで示し理解してもらいたい③単語にもっと興味を持ってもらいたい、というものです。そしてこうしたコラムによって、単語学習で疲れた学習者に「ほっと一息」ついてももらいたいという願いもつまっています。

10. レイアウトの工夫

英語が苦手な生徒にとっては「まず見た目のとっつきやすさ」が重要と考えました。よって、まず文字そのものを『LEAP』より大きくしました。これによって見やすく、ゆったりした気分になれるはず。さらに「Tip」(語源や語呂合わせ、派生語などを掲載)を右ページに移し、紙面のバランスを整えました。用例もできるだけ短くしたので、全体としてスッキリしたものになりました。

11. 音声データ・テスト作成ソフトの充実

『LEAP Basic』は、『LEAP』と同様に、英語を「理解する」だけではなく、「使える」ようにすることも目的にしています。そのため、音声データにも力を入れており、今回も4種類の音声データをご用意いたしました。それぞれの種類は、下記のような使用方法が考えられ、様々な音声トレーニングが可能になります。

- ① 〈単語・熟語(英→日)〉
⇒「単語・熟語」の意味の理解
- ② 〈用例(英→日)〉

⇒「用例」を用いた英文解釈トレーニング(英語を「聞く」トレーニング)

③ 〈用例(日→英)〉

⇒「用例」を用いた口頭英作文トレーニング(英語を「話す」トレーニング)

④ 〈用例(英のみ)〉

⇒「用例」を用いたディクテーション・シャドウイング

例えば、②〈用例(英→日)〉では、I am aware that something is wrong. ⇒ (ポーズ) ⇒ 「何かがおかしいと気づいている。」と、用例の音声で「英語」→「日本語」の順番で流れてきます。ポーズの間に日本語訳を考えてみることで、英文解釈のトレーニングが可能になります。また、③〈用例(日→英)〉では、「何かがおかしいと気づいている。」⇒ (ポーズ) ⇒ I am aware that something is wrong. となっていて、ポーズの間に英訳を考えて実際に口に出してみることで、口頭での英作文トレーニングが可能になります。今後の英語教育では、英語での発信力強化が重要なカギとなることは明白です。そのためのトレーニングとして、本書の音声データをご活用いただけましたら、幸いです。

テスト作成ソフト(数研テストマスター)では、様々な形式の小テストを気軽に作成できますので、生徒の習熟度を確認するためのテストなどにご利用ください。

12. 最後に

『LEAP Basic』の制作には、想像以上に時間がかかりました。執筆を通して、改めて中学校で習う単語・熟語の重要性を認識しました。LEAPという名前は、Learn English vocabulary, both Active and Passive「英語に関わる発信語彙も受信語彙も両方学ぶ」の頭文字を取ったものですが、同時に、生徒たちが4技能の英語世界へ「飛翔」してくれるようにという願いも込めています。英語を苦手とする生徒が本書で、基礎を固めて英語が使えるようになることを願ってやみません。

(駿台予備学校講師、学研プライムゼミ特任講師、
竹岡塾主宰)

【編集部注】『必携 英単語 LEAP Basic』は内容が変更される場合もございます。ご了承ください。